

幼児教育の独自性はどこにあるのか(5)

矢野 智司

生命のフレールベル 下

無関係にみえる事物や出来事を、共通するパターンを見いだす直感によって結びあわせる思考法は、とても高度なものです。このようななぞなぞは詩を生み出すだけでなく高度な哲学へと展開していきます。有名なスフィンクスのなぞなぞもそうですが、トールキンの名作ファンタジー『指輪物語』(瀬田貞二訳 評論社)の発端となった『ホビットの冒険』(瀬田貞二訳 岩波書店)の

なかで、ゴクリがビルボに出したなぞなぞはそう
です。

どんなものでも 食べつくす、

鳥も、獣も、木も草も。

鉄も、巖も、かみくだき、

勇士を殺し、町をほろぼし、

高い山さえ、ちりとなす。

答えはもちろん「時間」です。ビルボはゴクリから魔法の指輪を奪い、これが後の大きな物語となるのですが、続きは原作をお読みください（映画もすてきです）。さて時間という目に見えないものは、時計の発明によって人間の支配下に収まったようにみえます。私たちは一秒の何万分の一まで正確に計ることができるようになりました。しかし、どれほど細かく正確に時間を計測することができても、時間は人間のコントロールの及ばないものです。そして、時間の本当の力は、このなぞなぞによって直感的に理解されているように、すべてを食べ尽くし呑み尽くしてしまうところにあるのです。

フレーベルに戻りましょう。フレーベルは「子どもは植物だ」といいます。子どもを植物に喩え、保育者はその植物を育てる園丁（庭師）に喩えました。そうすることで保育を植物の栽培に喩

えました。このような文章は修辭上のたんなる喩えにとどまりません。植物と同様に、内発的に発芽し花を咲かせる力を、子どものなかに見て取る教育思想の表明でした。そして、そのような内発する力を育て守るものとして保育者をとらえる教育思想の表明でした。そのような教育思想は、外から働きかけて、保育者の思いにかなったように人間を作りだそうとする、それまでの教育思想の対極にあるものです。

このような保育を栽培に喩える保育の思想は、反対に栽培や園芸の智慧を保育の智慧に変えてまいります。たとえば、チェコの国民的作家カレル・チャペックの園芸家の楽しみを描いた『園芸家十二ヶ月』（小松太郎訳 中公文庫）といった本と、フレーベルの教育思想は不思議な共鳴現象を起こします。最後の箇所を引用しましょう。

われわれ園芸家は未来に生きているのだ。

バラが咲くと、来年はもつときれいに咲くだろうと考える。一〇年たったら、この小さな唐檜が一本の木になるだろう、と。早くこの一〇年がたつてくれたら！ 五〇年後にはこのシラカンバがどんなになるか、見たい。本物、いちばん肝心のものは、わたしたちの未来にある。新しい年を迎えるごとに高さとうつくしさがましていく。ありがたいことに、わたしたちはまた一年歳をとる。

園芸家のかわりに保育者を、バラや唐檜のかわりに子どもの名前を入れていくと、この園芸家の一年を描いたすてきな書物全体が、保育者を描いた物語として読むことができるでしょう。園芸家の植物への配慮や努力のあり方、あるいは開花への喜びや未来への希望には、保育者と共通すると

ころが少なくありません。

もちろん、保育を工場の生産活動に喩えることもできません。保育とは標準や基準どおりの優れた生産物を生み出すことです。このとき保育者は工場労働者です。あるいは、保育を陶工のようにとらえることもできます。子どもを理想的な形へと塑形していく保育。このとき保育者は陶芸家です。それぞれの喩えには一理あるところでしようが、幼児の教育において栽培のメタファーは、子どもの伸びようとする力を信じることに、子どもの成長の力を読み取って保育をすること、未来を信じることなど保育にとって大切なことを教えてくれます。栽培のメタファーは、現在でも幼児教育にとつては優れたメタファーだと思います。

この世界のうちには実に多様な事物や出来事があります。メタファーの思考法は、それらを固定したものにとらえず、発展していく生きたパ

ターンとしてとらえ、そのパターンの間に共通のパターンを見いだします。このような思考法は、神話的な思考法でもあり、一見すると未熟な低次の思考法とみえるかもしれませんが、遊びとなり詩となり物語となり哲学となるだけでなく、科学にもつながっていきます。科学技術の発明や発見に、メタファーの思考法が大きな役割を果たしていることは科学史でよく知られています。

さて、このようにフレイベルの思想の特徴を、メタファーの思考法としてとらえることで、フレイベルの教育思想はとてわかりやすくなりま



す。フレイベルの引用で見たように、フレイベルはすべてのもののなかに同一の自然に生命の法則が貫いていると考えました。ですから人間も植物と同じ法則でもって理解できると考えました。これは一種の宗教的信条のようなものですが、現代の自然科学においても、さまざまな事物や出来事のうちに同じ方の法則が貫いていることが知られています。たとえば、一律の動きで回転しながら成長する巻き貝の巻き方と、ひまわりの種子の配列は、同じらせん形であるだけでなく、同じ数学的法則にしたがっているのです。このような事例は、草花から虫や動物そして建築物にいたるまで多様なものにもまで及んでおり、ジョージ・ドーチの『デザインの自然学』（青土社）のなかにたくさん見ることができます。

前回、子どもが球をつかんだりはなしたりすることで、世界の秩序や宇宙の法則を予感するという教育思想は、不思議な思想だと述べました。し

かし、それは本当は不思議なことではありませ
ん。子どもが球をつかみはなすことと、宇宙を貫
く合一・分離・再合一の運動との間には、律動的
な運動に共通するパターンがあります。このミク
ロなパターンとマクロなパターンの間に共通する
パターンがあるとすると、子どもがミクロな世
界を作りだすことで、共鳴が生じマクロな世界を
予感することができると考えるのは、不思議でも
なんでもないことです。そしてこのリズムミカルな
共鳴は歌をともなつてなされ溶解体験へと導かれ
るのです。

このような共鳴は、恩物のようなメディアに
よつてのみならず、身体の振舞いによつても生じ
ます。たとえば、たくさんの子どもたちが輪に
なつて保育者の周りを取り囲んでいるのはそうで
す。幼稚園や保育園ではどこにでも見られるごく
普通の風景です。しかしフレーベルは手を結んで

輪を作ることには深い意味があると考えます。輪
を作ることで、子どもは全体と個という関係を学
ぶのだといえます。たしかに、輪になることで世
界の中に小さいながらも調和した一つの完全な宇
宙が出現します。そこではすべてのメンバーが平
等な位置に立つことができます。絵本作家たち
は、調和的な世界の姿をしばしば人間と動物たち
とが輪舞する姿で描いていますが、それはフレ
ーベルの思想を知らなくても合点がいくことでし
ょう。このように子どもは身体を使ったメタファ
ーの思考法を生きているのです。

ここでもフレーベルは「生の合一」が、つまり
溶解体験が生じるといいます。子どもたちは皆で
手をつなぎ輪を作ることと、集団全体と解け合う
瞬間を体験し、それとともに全体のなかの個とい
う認識も生じるといいます。子どもはこの体験を
言葉でもって適切に表現することはできません

し、またその必要性もありません。しかし、身体を通じたメタファーの体験は、子どもの身体を通して子どもの哲学となり、世界を動的なさまじまなつなかりとみるエコロジカルな世界観へと発展することになります。

このようにフレーベルの「生の合一」を中心とした教育思想には、発達することと生成することが同一であるような、言い換えれば、人間になることと人間を脱して動物になることが同一であるような原理を見ることができます。しかし、フレーベルの思想は、彼の身体に宿った自然Ⅱ生命をとらえる生の技法と密接につながっています。ですから、彼の書いたテキストを読んだだけでは実際に教育することはできません。後の世代になると、フレーベルの生きた精神を受け継ぐことができなくなり、彼の方法だけを形式的に墨守する

ことになりました。そのためフレーベルの幼児教育のシステムは、子どもの生きた現実からはなれ、その結果、石のようになり生命を失うことになったのです。フレーベルの教育システムが現代にそのまま通用するとは思いませんが、彼が目指していた自然Ⅱ生命との溶解体験としての「生の合一」の思想は、輝きと重要性を失ってはいないと思います。

さて、生成・遊び・動物になることなどが、これまでの幼児教育において特別なことでないことが明らかになったと思います。ではなぜこのような自然Ⅱ生命の思想が必要だというのでしょうか。次回の最終回では、幼児教育の独自性はどこにあるのかをそこから述べたいと思います。

(京都大学)